シリーズ TACという懸け橋 Vol.4

「買ってくれる人」がいるからこそ、農業を続けることができる。生産者と手を携えながら、消費者とのさらなる結びつきを求め、日々奮闘するTACの姿を追う。

福岡県　JAにじ／JA全農ふくれん | 新潟県　JA胎内市／JA全農にいがた | 静岡県　JAとぴあ浜松／静岡県JA営農センター | **滋賀県　JA北びわこ／JA全農しが** | 愛媛県　JA西条／JA全農えひめ | 宮城県　JAあさひな／JA全農みやぎ | 岩手県　JA新いわて／JA全農いわて

JA北びわこ　金田博（左）　水稲生産者　朝日正行（右）㊤

京都生協と合同で開催した消費者向けの稲刈りツアー・交流会。㊦

「TACは仲間」。一心同体で前に進んでいく。㊨

TACは大事な『仲間』

JA北びわこは、土地利用型農業を展開する地域だ。JAが取り扱う販売高の96%を、水稲・麦・大豆が占めている。冬期に降雪・積雪するため園芸作物を栽培するのは難しい。そこで考えたのが、「JA北びわこ生産基準米」だ。

消費者に対する安全・安心や、琵琶湖の水環境に配慮しながら、独自の生産基準を設けて付加価値をつけて生産・販売する。平成17年から取り組みをはじめた。GAPや生産履歴記帳などに取り組む意義を担い手に伝えつつ、積極的な生産提案と契約栽培を展開している。

TACの部署の設立は平成22年。設立メンバーであるTAC・金田博は、担い手の要望に応えられるよう、とにかく話を聴きに回った。浮かび上がってきたのは、労力を軽減できる「庭先集荷」や「フレコン集荷」だった。

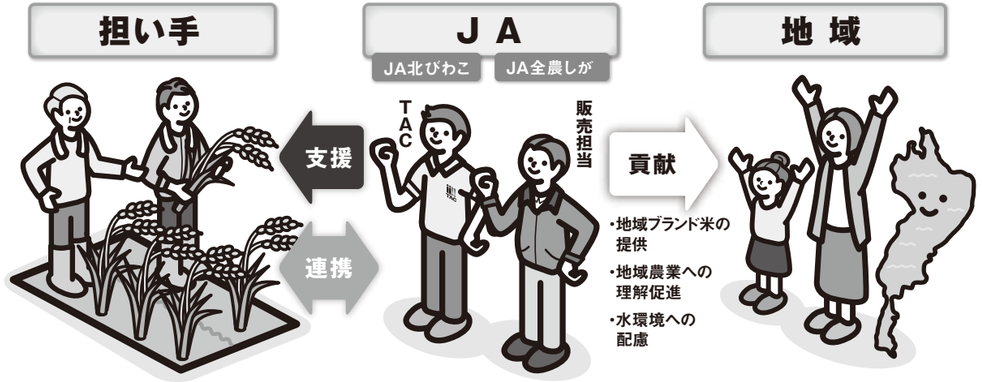
平成24年、TAC自ら担い手の軒先を訪問し、無償で集荷を実施。「収穫作業に専念でき、刈り遅れがなくなった」と品質保持の効果も出たことで高く評価された。担い手の経営安定にも寄与し、信頼関係も強まった。平成24年産米は、担い手に対する庭先集荷が1,480トン、フレコン集荷が360トン。この2つの集荷効果が実需者との安定供給にもつながり、よい循環が生まれている。

長浜市で水稲・麦・大豆を40ha栽培する朝日正行は言う。「生産に専念できるよう支援してくれるのが有難い。金田さんは、大事な『仲間』です」。ときに酒を酌み交わし親交を深める。父の代から続くJAとの付き合いを朝日もまた、継承する。

後継者が農業を続けられるように

TACは担い手だけではなく、販売部署と連携し消費者に向けても活動を展開している。京都生協・同JA販売施設課・JA全農しがと合同で稲刈りツアー・交流会を開催。消費者に実体験してもらうことで、「JA北びわこ生産基準米」のPRや地域の農業への理解促進につなげる。「この地域で行われていることを、時間をかけてでも地道に伝えていかなければならない」。取り組みは消費者の心をつかみ「JA北びわこのサポーターになりたい」という声も多く聞かれるようになった。金田たちTACも会合に参画し、そうした言葉を担い手にフィードバックしていく。

「協同組合としての力を発揮しながら、後継者たちがこの地域で農業を続けられるように企画立案していきたい」。金田は強い思いを持ち、地域農業の将来を見つめている。



第8回JAグループ 国産農畜産物商談会
2014年3月12日（水）10:00～17:00／13日（木）10:00～16:00
東京国際フォーラム展示ホール　主催 JA全農／JAバンク／JA全中

TAC（タック）とは、「地域農業の担い手に出向くJA担当者」の愛称です。
TACの役割
①地域農業の担い手に訪問してご意見・ご要望をうかがい、誠実にお応えします。
②地域農業の担い手の経営に役立つ各種情報をお届けします。
③地域農業の担い手のご意見を持ち帰り、JAグループの業務改善につなげます。
TACの由来
Team for Agricultural Coordination
JAグループが一体となって地域農業をコーディネートします。

営農販売企画部 TAC推進課
TEL：03-6271-8276
www.zennoh.or.jp
全農